

博士(人間科学)学位論文 概要書

ロシアの人口変動  
—過去・現在・将来の特徴—

*Population Change in Russia:  
Past, Present and Future Characteristics*

2008年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

トゥルヒーシ ミハイル

Trukhin Mikhail

研究指導教員: 店田 廣文 教授

本論文の目的は、ロシアの人口変動に複合的な分析を加え、そのような変化が社会・経済的發展に影響を及ぼすことを明らかにするところにある。

ロシアにおける人口学の歴史をみると、その誕生以来、多くの空白が残されている。19~20世紀の社会的・経済的激動（戦争、飢饉等）は、人口学的な過程に膨大な影響を及ぼし、ロシアの人口動態に生じた大きな変化の原因となった。

帝政ロシアにおいては、欧州諸国と違って極めて高い死亡率による人口喪失があった。その原因として、乳児死亡率が与えた影響は特に大きかった。子供とその母親、部分的にはその父親の死亡率に直接影響したのものとして好ましくない異常な外的環境、宗教が与える生活習慣、不衛生な居住条件、産前産後の母親の劣悪な生活環境（特に経済状態）、栄養状態の不良、低い教育レベル、そして、医療へのアクセスの困難さなどがその背景にあった。

第二次世界大戦後に社会・経済機構が整い、出生率と死亡率の低下が短期間のうちに急テンポで進んだ。ソ連崩壊後、1991年にロシアで始まった人口減少は現在まで引き続けている。きわめて低い出生率が問題である。その原因は、

少子化傾向の進展、第2次世界大戦での人口の喪失、ソ連崩壊後に現れた諸要因（政治・経済的不安、物価の上昇、急激な生活水準の低下、未来への信頼の低下など）である。さらに、急激な出生数低下の要因として、出生力が高い年齢である25~29歳の女性数の減少がある。また、妊娠中絶は出生抑制の方法の1つとして、高い割合を占めており、初妊娠者の中絶数が依然として高い。出生率の低下傾向は、婚姻率の低下過程と関連している。婚姻率低下の要因としてはコウホートの変化によるものがある。つまり、婚姻率が高いはずの25~29歳人口が減少したことによるものである。そのうえ、婚姻率の低下とともに離婚率の増加傾向が見られる。

なお、民族によって出生率は大きく異なり、また地域によって大きく異なっている。ロシアの出生率の中では、イスラム教徒の出生率が比較的高く、スラブ系民族の出生率が低い。単に現在においてそうであるばかりでなく将来においても、ロシア人口の出生率には著しい地域差が存続すると思われる。

さらに、先進国と違って高い死亡率が重要な問題である。その中でも過去・現在・将来での死亡率の上昇過程に注目しなければならない。その要因は、過去のロシアの人口史と同様、不安定な社会状況、経済生活の混乱、生活レベルの低下、医療費の高騰などである。また、自殺、事故、殺人などによる死亡の増加傾向が見られる。一方、過去・現在の高い乳児死亡率は深刻な問題である。WHOの出生定義に合わせ、体重と無関係に出生後に死亡したケースを乳児死亡に加えて修正した結果は、ロシアが他の先進諸国に大きく遅れていることを物語っている。このようなロシアの出生の定義の独自さが、国際比較を困難にしてい

る。現在の出生定義のもとであってさえ、ロシアの乳児死亡率は 20 世紀終り頃から 21 世紀始めにかけての十数年にわたり、多くの工業先進国よりも、かなり高い水準を示していることを明らかにした。

ロシアの平均寿命は先進諸国の中できわめて低いだけでなく、世界全体の中でも相当低い位置にある。しかも、男女間の平均寿命の格差は約 14 年と非常に大きい。さらに、ロシアでは地域別の平均寿命の格差がさらに著しく、最大 24 年に達する。平均寿命はシベリア、極東地域、北方地方で低く、南西地方、特にコーカサス、沿ヴォルガ、黒土地方で高い。

一方、人口移動の役割は急激に変わった。ソ連時代は政府の直接的勧奨、さらに政府の政策による地域別の人口移動が多かった。ソ連崩壊後、移動の特徴は変わり、移民、強制移住者、難民が紛争地域から非紛争地域へ流入した。また、移動流入のもう 1 つの特徴は、独立国家共同体諸国にいたロシア人のロシアへの移動であった。一方、1991~1993 年と 1998 年に、経済危機が続き、ロシアからの国際移動（頭脳流出）が強まった。低いロシアの出生率と高い死亡率の中で、移動による人口流入は人口増加の唯一の要因であるが、現在と将来のマイナスの自然増加を上回る見込みはほとんどない。

人口減少過程の中では、特に極東連邦管区の急激な人口減少問題がある。極東連邦管区地域では、年少人口および生産年齢人口が老年人口（年金受給者）よりも著しく少なくなっている。こうした事情は、多年にわたってこの地域で形成された人口と労働力のポテンシャルを破壊し続けている。将来にわたり、極東地域は開発初期と同様に自らの人口の再生産を行うことができず、その他の地域からの流入補給が必要となる。ところが、ロシアの地域にはそのために必要な人的資源がないと考えられる。また、労働力の減少は極東の経済開発にも悪い影響を与えている。

すなわち、ロシアでは人口減少が引き続いており、適切な人口政策が実施されない限り将来も止まる見込みはない。人口減少だけでなく、人口構造も変化し、人口高齢化が進み、社会保障制度の変更を余儀なくさせ、多くの経済的・社会的問題を引き起こしている。これも人口政策如何によるが、将来も同様である。

ロシアの人口変動の特徴を分析した結果、社会・経済的發展と人口成長との相互規定のうえで進行する過程の矛盾や多面性が浮び上がる。ロシアの人口変動過程は、国家制度や社会・経済制度が人口を再生産する体制や人口が再生産されてゆくダイナミズムに大きな影響を与える可能性を示している。